

各農業改良普及センター所長様
各農業協同組合長（営農担当者）様
各病害虫調査協力員様
各農業関係機関長・団体長様

京都府病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病害虫発生予報第3号（5月）

予報の概要

作物名	病害虫名	予想発生量 < 平年比（前年比） >
イネ	ヒメトビウンカ 縞葉枯病 イネミズゾウムシ	やや少 並 並～ <u>やや多</u> （やや多）
果樹	ナシ黒斑病 ナシ黒星病 カキ炭そ病	並（並） <u>やや多</u> （やや少） 並
チャ	チャノコカクモンハマキ クワシロカイガラムシ	並（並） 山城：やや少～並（並）
野菜	アブラムシ類とモザイク病 キャベツ菌核病 コナガ（キャベツ、ハクサイ） ネギさび病 ネギハモグリバエ ネギアザミウマ	並（並） <u>やや多</u> （やや多） 並（やや多） やや少（やや少） 並（やや多） やや少（やや少）

平年とは過去10年の平均である。

用語の定義

1 半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25	26～最終
	日	日	日	日	日	日

2 発生量 - - - 病害虫の発生程度と広がりの両面を加味したものをいう。

3 発生及び被害等の程度 - - - 程度は甚、多、中、少、無の5段階に分ける。
それぞれの病害虫の基準については各作物の項参照。

4 平年値 - - - 原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

5 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

- 農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること -

予報本文の見方

(例)

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比少ない（前年比少ない）
丹波 平年比やや多い（前年比やや多い）
発生時期：第3世代幼虫ふ化期8月第3～4半旬（平年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比として示しています。
- ・平年比の考え方は、「I 用語の定義」の「5 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は前年の実際の発生量（時期）との比較を示しています。
- ・必要に応じて地域別に示しています。

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、第2世代の発生量は山城で平年比少なく(-)、丹波でやや多い(+).
- (2) 第1世代成虫のフェロモントラップへの誘殺盛期は平年並であった。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップへの誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の根拠となった事項を示しています。
- ・文中の(-)、(+)は、発生量の予想に影響を及ぼすと考えられるもので、(-)の場合は発生量が少なくなる要因、(+)は発生量は多くなる要因を示します。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、4回世代を繰り返し、第2世代成虫が7月下旬～8月上中旬に発生し産卵する。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除上の留意事項、要防除水準等を示しています。

近畿地方 1 か月予報 (4月19日から5月18日までの天候見通し)

平成20年4月18日
大阪管区气象台発表

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は、数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の気温は、高い確率50%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は平年並の確率50%、2週目は高い確率50%、3～4週目は平年並または高い確率ともに40%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%) >

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	20	30	50
降水量	40	30	30
日照時	20	40	40

注意

大阪管区气象台から発表される天候の1か月予報の表現が、平成18年9月25日以降変わりました。

これまで病害虫発生予察の一つ根拠としていた天候の1か月予報の表現と整合性をとるため、病害虫防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「**5月の気温は高く、降水量は平年並、日照時間は平年並または多いと予想されている。**」としました。

お知らせ

残留農薬基準等のポジティブリスト制度導入に伴う農薬適正使用の徹底について

平成18年5月29日より食品衛生法に基づくポジティブリスト制度が導入され、いままで残留基準値が定められていなかった農薬成分と農作物の組み合わせにも、新たに国際基準等を参考として暫定的な基準値が設定されるとともに、参考となる基準がない場合には一律基準(人の健康を損なうおそれのない量; 0.01ppm)が適用され、基準値を超えて農薬が残留する食品(農産物等)の流通が禁止となりました。

このため、農薬の適正使用はもちろんのこと、周りの圃場の作物へ農薬が飛散(ドリフト)しないように十分注意してください。

また、水田において農薬を使用するときは農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに、止水期間を1週間程度とし、止水期間の農薬の流出を防止するために必要な水管理や畦畔整備等の措置を講じるよう努めてください。

予報本文

イネ

1 ヒメトビウンカと縞葉枯病

予報内容 発生量：ヒメトビウンカ 平年比やや少ない
縞葉枯病 平年並

予報の根拠

- (1) 4月中旬現在、ヒメトビウンカの発生量は平年比やや少ない(-)。
- (2) 昨年は、縞葉枯病の発生は認めていない。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ヒメトビウンカは、イネ科雑草で越冬するため、前年の発生状況等が翌年の発生に影響する。
- (2) 縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介され経卵伝染するが、近年、縞葉枯病の発生は散見される程度まで減少している。

2 イネミズゾウムシ

予報内容 発生量：平年並～やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 前年の新成虫の予察灯への飛来数は平年並～やや多い(+)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の新成虫が越冬し、田植え後、水田に侵入して葉を食害する。5月中下旬から卵を産む。
- (2) ふ化した幼虫は、土中で根を食害する。
- (3) イネが根腐れするような水田では幼虫の被害が出やすいので、深水を避け、根を健全に保つ。
- (4) 浅水管理は成虫の産卵行動を阻害し、産卵場所を制限する効果がある。
- (5) 粒剤の育苗箱施用の効果が高い。なお、イネドロオウムシの常発地では、この方法で防除ができる。
- (6) 育苗箱施用をしなかった場合や田植え後発生が多く、成虫が株当たり0.3頭を越える場合は、そのまま放置すると経済的被害が発生する。

3 苗立枯病

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌の多くは土壌生息菌である。山土や水田土壌等を使用する場合は、床土のpHを4.5～5.0に調整し、は種前に粉剤の床土混和を必ず行う。
- (2) 低温、多湿に経過するとピシウム属菌、高温多湿(特に出芽時)ではリゾープス属菌による苗立枯病が発生しやすくなる。育苗中の温度管理に注意し、出芽後は10～30の範囲で管理する。特に、トンネル育苗では外気の影響を受けやすいので、日中の高温や夜間の低温に注意する。
- (3) 出芽後はこまめに観察し、カビを認めれば直ちに登録のある農薬で防除する。菌の種類により効果のある薬剤が異なるので注意する。

4 もみ枯細菌病（苗腐敗症）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）病原細菌は種子伝染するため、塩水選と種子消毒を必ず実施する。
- （２）出芽時の温度は30℃を基準とする。ただし、加温しない育苗は10～30℃の範囲で管理する。
- （３）発病苗を植付けると本田で腐敗し、欠株となるので、発病した苗箱の苗は使用せず処分する。

5 苗いもち

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）種子伝染がいもち病の主要な伝染経路の一つであるため、健全な種子を用い、塩水選と種子消毒を必ず行う。
- （２）前年の稲わら、もみがらは有力な伝染源となるので、育苗場所の周辺には置かないようにする。

種子消毒について

- ・平成16、17年の調査で**MBI-D剤耐性いもち病菌**が一部地域で確認された。耐性菌の頻度低下と拡大防止のため、健全な種子を用い塩水選と**種子消毒**を必ず行う。
MBI-D剤：カルプロバミド（商品名：ウィンなど）、ジクロシメット（商品名：デラウスなど）、フェノキサニル（商品名：アチーブなど）

- ・温湯消毒を行う場合は必ず乾粒を用い、処理温度と時間を厳守するとともに、処理後は速やかに水で冷却し、直ぐに浸種・催芽を行う。また各機種の使用上の注意事項を遵守する。

ムギ

ムギ 赤かび病

赤かび病防除の徹底について

近年、大麦などの麦類の赤かび病による被害粒混入基準が厳しくなり、実需者から品質の高い麦生産が求められている。そこで、高品質の麦を安定確保するため、下記のとおり赤かび病防除の徹底が重要である。なお、薬剤を散布する場合は、近隣への声かけと飛散（ドリフト）防止には十分に気をつける。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）赤かび病菌は人畜に作用性の強いカビ毒をつくる。
- （２）開花期から2週間以内に雨が多いと発病が多くなる。開花は出穂期からおよそ1週間後である。
- （３）防除の適期は、「1回目：開花最盛期」、「2回目：1回目防除の7日後」が目安となる。
- （４）六条大麦は特に発生しやすいので、適期に遅れずに薬剤散布する。

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１）越冬病枝率は、平年並。
- （２）向こう１か月の気温は高く（＋）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）小袋掛け前に、病斑のある果実は摘果し防除を徹底し、速やかに小袋掛けを行う。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （１）前年秋期の発生量は、平年比多かった（＋）。
- （２）向こう１か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）果実では、幼果の時に感染する。
- （２）芽の基部に病斑が生じた枝は、切り取り処分する。

3 カキ 炭そ病

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- （１）前年秋期は発生を認めなかった（平年並）。
- （２）向こう１か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）主として枝の病斑で越冬し、新梢や果実への伝染源となる。
- （２）新梢の発病が多いと果実の発病が多くなるので、発病を認めた場合は、速やかに切り取り園外の土中に埋める等処分する。
- （３）５～６月に降雨が多いと、新梢や幼果の発病が増える。

4 カキ フジコナカイガラムシ

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）通風のよくない園で発生が多くなる傾向がある。
- （２）前年カメムシ類等の防除に、合成ピレスロイド系薬剤を多く使用した園で発生しやすい。

5 ブドウ 灰色かび病

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）発病適温は２３前後で、開花前に降雨が続くと、突発的に発生することがある。
- （２）ジベレリン処理したものは、開花終了後に花がらを落とす。
- （３）ハウス栽培では換気に努める等、予防を徹底する。

チャ

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発 生 量：平年並（前年並）
幼虫ふ化時期：5月第6半旬～6月第1半旬（平年並）

予報の根拠

- （1）前年秋期の発生量は平年並。
- （2）4月中旬現在、発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
- （2）通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
- （3）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

2 クワシロカイガラムシ

予報内容 発 生 量：平年比やや少ない～並（前年並）
幼虫ふ化時期：5月第6半旬～6月第1半旬（平年並）

予報の根拠

- （1）前年秋期の発生量は、平年並。
- （2）4月中旬現在、発生量は山城で平年比少なく（-）、丹波で平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）年間3回（一部山間部では2回）発生する。ふ化直後の1齢幼虫は、まだ口ウ物質で覆われておらず、移動することができる。また、5月下旬頃の第1回目の幼虫ふ化期は時期が比較的揃っているため、この時期のふ化幼虫を対象とする防除は一年中で最も効果的である。
- （2）発生は園により差があるので、毎年発生し前年に適期防除できなかった園では注意する。なお、標高の高いところでは、ふ化が10日程度遅れる。
- （3）多発している園も認められるので園を見回り、発生の多い園では注意する。
- （4）寄生が著しい茶園では、一番茶後すみやかに中切り、深刈りを実施し樹勢の回復を図る。

3 チャノホソガ

4月中旬の巡回調査では平年並の発生であったが、フェロモントラップへの誘殺数は宇治市で平年比多く、綾部市で平年並であった。また、普及センターの情報によると、一部で多発園が認められているので今後の発生に注意する。

4 ミカントゲコナジラミ

ミカントゲコナジラミは、平成16年8月に京都府で、国内で初めてチャへの寄生が確認され、分布の拡大が懸念されている。4月中旬の巡回調査では、山城地域の多くの園で幼虫が確認された。また、成虫が飛翔している園も認めた。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）成虫の発生時期

年に4回発生し、越冬世代は4月下旬～5月中旬に発生すると予測される。

- （2）対策

農薬による防除適期は若齢幼虫期であり、1回目の防除適期は6月頃（越冬世代成虫の飛翔が落ちついた頃）と予測されるので、この時期に防除する。成虫発生期

の散布では密度抑制効果が不十分である。

(3) 登録のある薬剤

- ・ハチハチ乳剤(1,000倍、摘採14日前まで/1回)
- ・アブロード水和剤(1,000倍、摘採14日前まで/2回以内)
- ・アブロードエースフロアブル(1,000倍、摘採14日前まで/1回)

里 予 菜

1 アブラムシ類とモザイク病(ナス、トマト、トウガラシ、キュウリなど)

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 4月中旬現在、発生を認めなかった(平年並)。
- (2) 4月第4半旬現在、黄色水盤への誘殺数は例年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散・飛来し、発生が拡大する。
- (3) 定植時のシルバーストライプマルチは有翅虫の飛来に忌避効果がある。

2 キャベツ 菌核病

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 前年秋期の発生量は、平年比多かった(+)
- (2) 4月中旬現在、発生を認めている。
- (3) 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春に発生が多く、適温は20前後、曇雨天が続いた時に発生しやすい。
- (2) 発生終期に菌核が形成され土中に落ち、次の伝染源となる。菌核は土壌中で2~3年間生存可能である。

3 コナガ(キャベツ、ハクサイなど)

予報内容 発生量：平年並(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 4月中旬現在、発生量は平年並。
- (2) 4月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年比やや少ない(-)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 防虫ネット等を利用し、物理的防除に努める。
- (2) 年間の発生回数が多く、各発育段階(卵、幼虫、蛹、成虫)が混在する。

4 ネギ さび病

予報内容 発生量： 平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （ 1 ） 4 月中旬現在、発生量は平年並。
- （ 2 ） 向こう 1 か月の気温は高く（ - ）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （ 1 ） 前年の秋に多発して、冬が温暖多雨に経過すると、春に多発する。
- （ 2 ） 春に比較的低温で、降雨が多いと多発する傾向がある。

5 ネギハモグリバエ（ネギ）

予報内容 発生量： 平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

- （ 1 ） 4 月中旬現在、発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （ 1 ） 蛹で越冬し、成虫は 4 月中旬頃から発生する。年間 5 ～ 6 世代繰り返す。
- （ 2 ） 比較的砂地の土壌で発生が多く、5 ～ 6 月に少雨の年に多発する。
- （ 3 ） ネギの被害残さが発生源となるので注意する。

6 ネギアザミウマ（ネギ）

予報内容 発生量： 平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- （ 1 ） 4 月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（ - ）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （ 1 ） 年間 10 世代以上くり返し、葉の表層を食害、かすり状の食害痕を残す。
- （ 2 ） 葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- （ 3 ） ネギの被害残さが発生源となるので注意する。

7 トマト黄化葉巻病

トマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV：Tomato Yellow Leaf Curl Virus）の感染により引き起こされる病気である。平成 17 年 12 月に府南部の抑制栽培トマトで発生が確認された。

最近では、平成 20 年 1 月に発生を確認しており、今後とも注意が必要である。

発生生態及び防除上注意すべき事項

トマト黄化葉巻病の発生・拡大を防ぐためには、「トマト黄化葉巻ウイルスの伝染環を絶つ」ことが重要である。そのためには、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

防除対策の基本事項

- ・ 施設内にウイルス・コナジラミを「入れない」。
- ・ 施設内・施設周辺のコナジラミを「増やさない」。
- ・ 施設内からコナジラミを施設外に「出さない」。

- （ 1 ） タバココナジラミ類を介して伝染するので、発生状況に注意する。
- （ 2 ） 苗を購入する時は、コナジラミ類が寄生していないか、先端部の葉が黄色くなって表側が巻いていないかを確認し、健全な苗を植え付ける。
- （ 3 ） 発病した株については抜き取り、袋に入れて密封して枯死させるか土中に埋めて処分する。
- （ 4 ） 野良生えトマトも重要な伝染源となるので、自生したトマトは除去する。

- (5) 開口部(サイド、出入口、天窓等)すべてを0.4mm目合いの防虫ネットで被覆する。出入口は2重に被覆する。
- (6) 黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
- (7) 近紫外線カットフィルムを使用する。
- (8) コナジラミ類に対する発生初期の防除を徹底する。薬剤で防除する場合は、葉裏までていねいに散布する。
- (9) 同一系統の薬剤の連用は薬剤感受性の低下につながるため、ローテーション防除を実施する。
- (10) 天敵や微生物農薬を有効利用する。
- (11) ラノーテープを使用する場合は、定植直後から使用する。
- (12) 黄色粘着板を吊り下げて、コナジラミ類の発生を把握する。

8 タバココナジラミ類

タバココナジラミ類は世界中に分布し、多くのバイオタイプ(形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統)が存在する。本州では在来系統(バイオタイプJpL)、バイオタイプB(従来のシルバーリーフコナジラミ)、バイオタイプQが確認されている。

農業総合研究所と病害虫防除所が行ったコナジラミ類分布調査では、タバココナジラミ類は京都府全域に発生していることが判った。平成17年にはバイオタイプQが府内で初めて山城で確認され、平成19年には福知山市まで発生地域が拡大した(平成19年11月6日付け防除所ニュース第14号参照)。

タバココナジラミ類は、夏以降発生が増加し、また、薬剤感受性が低く難防除害虫といわれていることから、総合的な防除対策(トマト黄化葉巻病参照のこと)が必要である。

病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農業情報は、農林水産省ホームページの「農業コナ」をご覧ください。
ホームページアドレス <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

農業改良普及センター 電話番号一覧		
・京都乙訓	農業改良普及センター	075 - 315 - 2906
・山城北	農業改良普及センター	0774 - 62 - 8686
・山城南	農業改良普及センター	0774 - 72 - 0237
・南丹	農業改良普及センター	0771 - 62 - 0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773 - 42 - 2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773 - 22 - 4901
・丹後	農業改良普及センター	0772 - 62 - 4308

農作物病虫害情報サービス	
・テレホンサービス	0771 - 23 - 6442
・ホームページアドレス	http://www.pref.kyoto.jp/byogai/

京都府病虫害防除所

〒621 - 0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539